

用語について (IV)

山口青邨

次に假名づかひといふことである、これも終戦後、新假名づかひといふものが出来て、つまり發音通りに書くといふことになった。をがおに、へ、ゑはえに、ぢはじに、づはずにすることになり、動詞の活用も以前のやうには行活用だの、や行活用だのとむづかしいことがなくなつた。日用のことにはまあ、それでもよいけれど、歌や俳句になるとどうもうまくない、とても我慢が出来ない。私は今なほ俳句や随筆には舊假名づかひを使つてゐる、もつとも、さうしてやっても、新聞社や雑誌社では勝手に新假名づかひに直して載せてゐる、それは眼をつぶつてだまつてゐる。俳句では困るので、さうしないやうに特に頼んでゐる。一番困るのは「出づ」といふのを、新假名づかひでは「出ず」と書く、これでは打消しになって意味が反對になつてしまふ。

私は言葉、文字はなるべく平易にするといふ原則には賛成なんだが、同時にうつくしい日本語にしたいといふ熱意をもつてゐる。

俳句には漢字ばかりで出来てゐるのもあるし、假名ばかりで出来てゐるのもある。

奈良七重七堂 伽藍八重櫻 芭蕉

いややさしむらさきしきぶをりもてば 青邨

どっちにもその文字から來る感じがあつて、その内容を豊かにし、うつくしくしてゐる、どっちも文字に關しての技巧である。

これは兩極端を擧げたが、漢字と假名とを適當に排列することによつて、美しさ、階調をよく表現するに役立てることが出来る、俳句に於てはさういふ點からも一字もおろそかに出来ない。

山口青邨著『俳句入門』より抜粋